

P15 外傷を初診時主訴とする患者の実態調査

Clinico-statistical investigation of injury patients

○緒方 麻記 落合 聡

Maki Ogata Satoru Ochiai

(医) 雪ノ聖母会聖マリア病院小児歯科

Department of Pediatric Dentistry St.Mary's Hospital

【緒言】

当院は救急医療提供を役割の1つとしており、当科に関連するものとして外傷が挙げられる。今回、各年齢における受傷状況を明確にするために口腔外傷の状況について調査したので報告する。

【対象と方法】

平成19年4月から平成20年3月の1年間に外傷を主訴に当科を受診した73名を対象に診療録をもとに、年齢、受傷部位、原因等について調査した。

【結果】

年齢は0歳から32歳と広範囲に分布していたが、1歳が23名と最も多く、次いで0歳および2歳が各12名であった。受傷部位は、歯牙が最も多かったが、低年齢では上唇小帯や口腔軟組織の受傷が多くみられた。原因は、最も人数の多い1歳では走っている転倒が多く、次いで0歳ではつかまり立ちでの転倒、2歳では風呂場や階段での転落が多かった。

【考察】

受傷年齢は広範囲に分布していたが、2歳までの低年齢児が半数以上を占めていた。低年齢児では口腔領域受傷の頻度は高いといわれており今回の調査においてもその傾向がみられた。特に各年齢の行動(0歳:つかまり立ち、1歳:歩き走り始める等)と関連した受傷が多く、日常生活において常に受傷の可能性はあると考えられる。今後、受傷状況をより明確にすることで、保護者に対し各年齢において配慮する点を指導できればと考えている。

【文献】

1)小児の歯の外傷の実態調査, 小児歯誌 34(1): 1-20, 1996